

家族農業の10年

表紙のことば

写真と文：鈴木正美

〈斎藤喜也さんご一家〉

昭和60年代に御坊市に入ってきたスターチス。豆の連作障害に悩まされていたこの地にとってまさに救世主だった。

水はけのよい土質と、温暖な気候にぴったり合った。地中海沿岸が原産地の可憐な花。「これや！」先人たちはそう叫んだ。斎藤喜也さんは農業を始めて18年。スターチスのイメージアップを地道に行ってきた。

「母の日参り」という活動をご存じだろうか？ もともと亡き母の追悼がきっかけになっている、アメリカ発祥の「母の日」。JA紀州青年部が行っている「母の日に家族でお墓参りに

行こう」という活動だ。まだ生花として、スターチスの知名度は低い。「びっくりするんじゃないかな。花瓶に水を入れなくていい。ドライでも楽しめますし、手間もかからず本当に日持ちがする。お墓参りって西洋ではピクニックのように明るく楽しいものなんですよ」

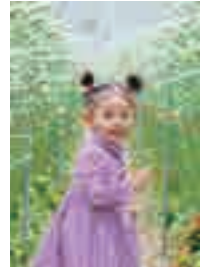
自他ともに認めるポジティブシンキング。苦労話は出てこない。

「畑で育ったんですよ。農業は人を笑顔にできる職業。課題はあるけど、物心ついたときから就農を決めてました。一瞬、野球選手にも憧れたけどね」

美しく可憐な花々の中で妻の笑子さん、子どもたちと写真を撮影した。長女的美怜ちゃんが花の中へ駆け出す。花の妖精のようなかわいさに思わずシャッターを切った。



「美怜！美怜！」呼び掛ける喜也さんから幸せがあふれ出す。I♡FAMILYのTシャツを着た喜也さんが愛し、大切に育てたスターチス。たくさんの人々を笑顔にするに違いない。まだ先ですが、美怜ちゃんといぶき衣吹ちゃんがお嫁入りなんてことになったら……喜也さん、きっと大変ですよお！（笑）今から心配。



JAグループ 共通コンテンツ

食・農・地域の暮らしを支えるJAの存在意義や取り組みを紹介するJAグループ共通コンテンツ（JA新聞連『JA広報通信』にて提供中）。今年度は、「未来を拓く協同組合 JAと農業」をテーマに毎月分かりやすく解説します。JA広報誌への掲載等により、組合員や地域住民への情報提供資料として、ぜひご活用ください。

農業を拓く協同組合 JAと農業 監修=JCA (日本協同組合連携機構)

「地域」に根ざした協同組合

JAグループは、JAのあるべき姿を「食と農を基軸として地域に根ざした協同組合」と定め、「持続可能な農業」と「豊かで暮らしやすい地域社会」の実現を目指しています。そのために、全国各地域に設けている支所・支店や営農センターなどを通じて総合事業を展開し、組合員の営農と暮らしを支えています。

買い物に困難な地域を対象に移動購買車・金融店舗車を巡回させているJA、地方公共団体など多様な組織と連携協定を結び、高齢者の見守り活動も行っているJAもあります。JAは、地域を支える重要な生活インフラとしての機能をこれからも強化していきます。

語句解説

【総合事業】
(そうごうじぎょう)

栽培技術や農業経営にかかる助言を行う営農指導事業、農産物の販売や農業資材の購入、ファーマーズマーケットの運営などの経済事業、貯金などの信用事業、生命や建物、車などの共済事業、高齢者福祉や健康管理、旅行などJAの幅広い事業全体のこと。ATM、Aコープやガソリンスタンド、病院や介護事業の運営もそのひとつ。

組合員・地域住民の事業利用例



耕そう、大地と地域の未来。